

Deutscher Märchenkatalog.
Ein Typenverzeichnis.

(ドイツ語圏昔話カタログ 話型目録)

Hans-Jörg Uther (ハンス・ヨルク・ウター) 著

Waxmann (ヴァックスマン) 刊

『国際昔話の型 (ATU)』のウターによるドイツ語圏昔話の話型カタログ。(ATUの書評は本誌第二十九号を参照)。「中世から二十世紀にかけての様々な資料にみられるドイツ語の伝承話を初めて徹底的に記録し」たもので、中世末期〜近代の史料、一八〇〇〜一九九〇年刊行の民話資料、つまり、過去及び現在のドイツ語が話される地域における書承話・口承話が網羅され、一一〇〇を超える話型が収められている。このカタログの土台をなすのはATUで、分類および話型番号はATUに拠る。話型名はATUと多少異なる部分もあるが、構成は以下の通りである。

動物昔話―野獣、野獣と家畜、人間と野獣、家畜、その他の動物と物
魔法昔話―超自然的敵対者、超自然的または魔法にかけられた妻(夫)またはその他の親族、超自然的難題、超自然的援助者、呪物、超自然的力あるいは能力、その他の超自然的出来事

伝説的昔話とその他の宗教的な話―神が賞罰を与える、真実が明るみにでる、天国への出入り、悪魔との約束、その他の宗教的な話

現実的(小説的)物語―男女の関わりと争い、貞節と無実の試験、手に負えない妻、良い教え、賢い機転のきく行いまたは答え、運命の物語、盗賊と殺人者、その他の小説的昔話

愚かな鬼(巨人、悪魔)の話―労働の契約または賭け、人間と超自然的存在の協力、人間と鬼の競争、人間が鬼をだます

笑話とその他の滑稽な物語―愚か村話、夫婦についての笑話、女についての笑話、男についての笑話、聖職者と教会職についての笑話、その他の職業や民族集団についての笑話、ほら話

累積譚と形式譚―形式譚、問いかけ話(尻切れ話、果てなし話)

これに続けて、新話型及び変更・補足された話型の番号と話型名が示され、巻末にモチーフ索引、文献及び略号一覧、事項索引が付される。七六〇頁の大著である。

各話型は、番号、話型名、内容の説明からなる。「注記」の項には、重要な文字資料やその話型の年齢、起源、伝承範囲や特殊性についての情報、「文献／類話」には、重要な

先行研究と類話集、「カタログ」には、ある時代やある地域の伝承話をまとめた話型カタログやハンドブックにおける該当箇所があげられる。そして、その話型に該当する類話は地域別に、その資料集の刊行が一八〇〇年以前かそれ以後かによって分けられて記載されている。

ウターが編集と執筆に長く携わったゲッティンゲン学術アカデミーのプロジェクト『昔話百科事典』は、一九七七年の刊行開始から三十八年を経て、十四巻と索引巻をもつて二〇一五年に完結した。この編纂所には世界中から口承文芸関連の資料や研究成果が集められたが、そのようなわば理想的な環境下で、ウターは『国際昔話の型』(第二版、二〇一一年)、『グリム童話ハンドブック』(第二版、二〇一三年)に続けて、この『ドイツ語圏昔話カタログ』を出版、大仕事を成し遂げた。『昔話百科事典』と合わせ、これらのハンドブックやカタログの恩恵を被る私たちが、口承文芸研究をこれからのように掘げあるいは深めていくのか、それが問われるだろう。(間宮史子)

(二〇一五年／五九ユーロ)

『季節のなかの神々 歳時民俗考』

小池淳一著

春秋社刊

後悔している。実にもったいない読み方を
してしまった。

書誌紹介を執筆するために、一気に読んで
しまったからだ。歳時民俗の捉え方について
説く「はじめに 歳時の相貌」に続いて「春
の章」から「冬・新年の章」へと四季を追う
四章・五十八タイトルのエッセイで構成され
た本書は、しばらく座右に置き、過ぎ行く時
間と季節にしたがってゆっくりと読み進めて
みたかった。

小池は、金子兜太主宰の俳句雑誌『海程』
に連載した記事をもとに、先に『伝承歳時
記』(二〇〇六)を上梓している。そして本
書は、同誌に関わる出版社のホームページに
二〇〇九年から二年にわたり連載された記事
をもとに編まれている。前著が、俳句の世界
に寄り添い、季語という約束事の向こう側を
広がる生活の諸相を、行事と民俗事象を通し
て解説していくスタイルであったのに対し

て、本書は、季語の感覚と想像力に導かれた
構成とタイトルに従って、読者をぐいぐいと
民俗学の蓄積へと誘っていく。

歳時民俗は、民俗学の調べごとの最
も基本的なものである一方で、そこから人び
との暮らしのあらゆる領域にわたる歴史と現
在へ視野を広げていくことができる豊かさを
持っている。小池は、一つひとつのテーマに
ついて、書籍から論文まで重要な研究に言及
しながら、現時点での行事の位置づけ、今後
の議論の可能性までを手際よく語っていく。
広い目配りと、それぞれの問題に関する深い
洞察に裏付けられた、いい意味での手練れの
仕事である。

明治六年に施行された太陽暦の採用とい
う歳時の近代に関わる難問も、この問題を私
達が身近に感じることができる、盆行事と新
年に関連する「七夕と盆と星と」「トシの神」
のなかで言及し、未だに解消されない私達の
季節感と暦のずれに関心を向けさせる。

そして、「おわりに」 歳時民俗と俳句的世
界」では、過去から現在へと一方向に流れる
時間を扱う歴史学に対して、繰り返しと反復
のなかにある習俗の時間を扱う民俗学の違い
を指摘し、改めて民俗の知識と俳句の創作を

架橋してみせる。歳時民俗に凝縮された日常
生活と神仏への意識を、季語を通して俳句と
いう文芸に「飛躍させていく可能性」を主張
する。

しかし、本文の中にさりげなく埋め込まれ
た小池の若き日の鮮烈な経験の逸話が、強く
印象に残る。小池が学生時代に、夏の盛りにも
もかかわらずイロリに火を熾いていた栃木の
旧家の主人に聞き書きし、別れ際に告げられ
た「お静かに」という丁寧な挨拶のなかに、
旧家に積み重ねられた長い時間を実感したと
いう話。また小池が若い頃、遠山の霜月神楽
に通っていた時、明け方になって、夜通し続
いた舞の最後に出現する「宮天伯」の姿に、
長い年月人びとが祈りを捧げてきた神が現前
したような気がして、「こうした神とそれを
信じてきた人々」を知りたいと思ったことが
民俗学志望の大きな動機の一つになったと
いう話。いずれも、今、「季節のなかの神々」
を語る小池を導いてきた、とっておきの話で
あるに違いない。

(重信幸彦)

(二〇一五年十月／本体二〇〇〇円)

『水窪のむかしばなし』

二本松康宏監修 植田沙来・内村ゆうき・

野津彩綾・福島愛生・山本理沙子編著
三弥井書店刊

書名が示すとおり、静岡県浜松市天竜区水窪町の口承文芸資料集である。「むかしばなし」とあるが収録されている内容は昔話に限らず、昔話四二話、伝説一五話、世間話二五話の全八二話が収録されており、巻末にはそれぞれの話型対応表が掲載されている。さらに採訪調査に入った地域について、地勢や歴史、信仰などの解説も掲載されている。

本書の特色は、聞き取りから文字起こし、掲載話の選定、地域解説の執筆などを、静岡文化芸術大学の二本松康宏ゼミに所属している学生がおこなっている点だろう。

また収録されている話は方言や語り口がそのまま掲載されており、語りの風景が生に伝わってくる。

その語りの風景については、「序」によるとどの話者も子や孫に語った経験はなく、子供の頃に聞いた記憶を思い起こしながらであったという。

本書の元となる採訪調査は、参加する学生が一年ごとに入れ替わりながら三ヶ年ですべての集落での調査を行う予定であるという。第二集、第三集の刊行が待ち遠しい。(瀬戸口真規)

(二〇一五年三月／本体一〇〇〇円)

『ひるげんの民話』

—真庭市・美甘栄枝の語り—

立石憲利・森俊弘著
真庭民話研究会刊

伝承の民話に新しい一冊が加わった。消滅寸前で聞取りの難しい昨今だが、『まにわの民話』『真庭市の民話』（既刊三冊）など、数多くの民話を集めてこられた立石さんならではの仕事である。昔話は「米俵・榎埋め」「はととぎすと兄弟」「和尚と小僧・寒の風」「平林」「鮎の仲裁」など六話と少ないが、世間話・伝説など四五話がある。語り口や擬音の使い方にも語り手の資質が見られる。

男と女の話は単に色っぽい話ではなく、江戸小咄や古典落語にも通ずる民衆の文芸であり、昔話の話型にある「みやげは足袋」「聞き違い―商売物」「下の口も養え」「お」の字の禁」など、全国に分布するものも多い。

解説では蒜山の歴史や語り手の特徴に触れている。語り手の美甘さんは立石さんの語りの学校の受講生で、語りの活動をされているとのことで頼もしい。民話が新しく語り継がれていくことを願ってやまない。民話の伝承や語り口、新しい語り手にゆだねられた民話の今後を考える上でも貴重な一冊である。(佐々木達司)

(二〇一五年六月／本体一一〇〇円)

『1976年夏 東北の昔ばなし』

聖和学園短大生のレポートから』

聖和学園短期大学国文学科学生著
久野俊彦・錦仁案内人
笠間書院刊

仙台の短期大学生が夏休みの課題として収集した昔話が、東日本大震災を経て、四〇年ぶりに日の目を見た。学生のほとんどが東北六県出身、ことに震災被害の甚大だった岩手・宮城・福島で明治生まれの語り手から聞いた昔話が多く、六一人の語り手による一五三話が、録音からの翻字の形で収められる。担当教員だった錦仁氏と、友人の久野俊彦氏が、案内人という形でまとめたもの。

錦氏が「あとがき」で特筆する点として、岩手県遠野の語り手が、のちに注目される以前の語り手が記録されている点、宮城県大崎の語り手は、地元雑誌に昔話を掲載している語り手である点、宮城県黒川郡の語り手は、世間話も含め語り手の思いの感じられる語りになっている点などを挙げる。

『日本昔話通観』の話型に準拠しつつも、地域ごとに配列し、語り手と聞き手の関係も明記され、総ルビになっており、語り聴く関係の中にあつた昔話の「音」が感じとれる。

(二〇一五年八月／本体二八〇〇円)
(根岸英之)

『語りた い こんな民話』

小野和子著
みやぎ民話の会刊

本書は宮城県を中心に採訪を続ける著者が出会った話や「民話の種」をもとに四章から成る。第一章から第三章は、子どもの成長に合わせて話が並べられているが、私たちが調査で聞くような話の断片も見事に整えられている。また言葉の説明や今では分かりづらくなっている事象も丁寧な語りの形で示されている。そして第四章の「一人称の語りへの試み」は、著者が「虚構の物語として成り立っている民話の背後には、いつもこうした一連の「暮らしの話」が横たわっていることを知っていたらしく助けになれば」と述べているように、昔話が生き生きと輝く時代的生活をしのばせる話や、今では聞くことが難しくなった戦争の話などが収められている。このように話がただ単独で存在するものではなく、話の背景となる生活の様子にまで気配っていることが伝わってくる著書となっている。語りのテキストと読み物としてももちろん、研究者の資料としても、とても興味深い一冊である。

(山田栄克)
(二〇一五年九月／本体一〇〇〇円)

レクチャーブックス・お話入門7
『語るためのテキストをととのえる
—長い話を短くする』

松岡享子編著
東京子ども図書館刊

一九九八年九月から翌一九九九年九月まで全十回行われた、東京子ども図書館主催の連続講座「語るためのテキストをととのえる」の記録である。ここで「ととのえる」とは、副題にあるように「そのままでは長くて語れない話を、一回で語れる程度に短くする」意という。取り上げられた素材は、ユーゴスラビアの昔話「子どもと馬」とアンデルセン作「白鳥」(創作だが土台は昔話と捉える)である。十四名の受講者が二班に分かれて、前二話をそれぞれ担当しながら、各自の考えで作品を短くしていく過程が誌上に再現される。事前の課題、具体的かつ妥協のない講師の指導、原稿提出期限厳守等厳しい要求に応えて、ととのえられた形になり、実際に語ってみるまでに仕上がる。目標達成である。「短くしたテキスト例 原文対照」が付録に付く。本書は、講座修了直後に刊行されたB5版の冊子を読みやすく編集し直して再刊されたものである。

(杉浦邦子)
(二〇一四年六月／本体二二〇〇円)

『間中一代さんの栃木語り』

野村敬子・霧林宏道編著
瑞木書房刊

新たな視点の口承文芸記録集が刊行された。従来の記録集は祖父や父母から聞いたいわゆる伝承の語り手の昔話をまとめたものであったが、本書は語り手が他の語り手から聞いた話や書物の中の話を自分なりに語った記録集である。語り手は栃木で生まれ育った間中一代さん。栃木伝説三二話、昔話・世間話五七話、間中さんの多様な場での活動記録、編著者による研究ノートが収められている。伝承の語り手が日本から消える日は遠くない。将来の語り手研究は、本書の語り手のような新しい語り手が対象となる。その意味において本書は先駆的かつ画期的な記録集といえる。日本口承文芸学会の「なすべきは言語芸術対面文芸としての昔話が有する本源的な力量を世に知らしめること」という編著者の提言を、学会として真摯に受けとめる必要があるのではないか。

(大島廣志)
(二〇一五年十月／本体二五〇〇円)

『山怪 山人が語る不思議な話』

田中康弘著
山と溪谷社刊

登山ブームに便乗した類書との間に一線を画す快作。著者の本業はカメラマンで、二十年以上にわたって秋田県阿仁のマタギたちを取材してきた。多くの写真を取めた「マタギ矛盾なき労働と食文化」など、すでに複数の関連著作がある。本書は、山の生活を知る著者の、ふとしたおそれによって導かれた。家族の語らいの場が失われた今、かつて頻繁に語られていた、土地にまつわる不思議な話(口承文芸学的に言えば「世間話」)が消え去るのではないか、という危機感である。そして著者は、阿仁だけでなく日本各地の山間地を訪ね歩いては、狐・神隠し・謎の怪物、ツチノコ等々にまつわる不思議な話を聞き集めた。評者がとくに興味を引かれたのは、かつて光り物や狐火などと呼ばれていた山中の怪火が、現代の語りにおいてときに「UFO」と表現され、著者もそれを在りのままに記してきている点である。山や怪異に向けられてきた民俗学的な関心と隣接しながらも、本書には学ぶべき新たな切り口が開かれている。

(今井秀和)
(二〇一五年六月／本体二二〇〇円)

『河内王朝の山海の政―枯野琴と国栖奏』

島山篤著
白地社刊

本書は、応神天皇を始祖とする河内王朝が国内を統治するにあたって、農耕民を支配するための「食国の政」と、山人と海人を支配するための「山海の政」とに分けていたと述べ、とくに「山海の政」に注目する。そして「枯野伝承」と「国栖伝承」を取り上げて、それぞれ伝承の生成過程を明らかにしつつ、河内王朝の実像に迫ろうとする。具体的には、伝承の生成過程に関して、淡路島の海人族、および吉野の国栖族が持ち伝えた祭祀伝承であったのが、王権に服属し、統治されたことで変容し、さらには記紀に記載されるにあたって物語化、歴史化されたと論じる。

なかでも、枯野琴の歌に関して、「さやさや」を風いだ潮騒の音と解し、この歌は時化を風ぎにしよんとするための歌だったとする。また、国栖奏に関して、「さやさや」を冬木の下木が若葉を茂らせて鳴り響くことと解し、この歌は櫃の森に春を招くための歌だったとする。著者独自の見解がなされていて、興味深い。一読をお勧めしたい。

(入江英弥)
(二〇一四年九月／本体二三〇〇円)

『中国民間故事集成』総目索引

鈴木健之編
私家版

本書は、中国で出版された「中国民間故事集成」に収録されている全ての民間故事(神話・伝説・昔話)の題目索引である。

「中国民間故事集成」は、中国全土(台湾を除く)の話にあたる際、最も信頼の置ける資料集である。国家的事業として、一九八四年から調査が行われ、一九九〇年までに一八四万余話が収集された。これらは、科学性(資料集としての正確さ)を重視した採集と編集方針の下、中国の県(省の下の地方行政区画)ごとに活字資料にまとめられた。そこから取捨選択されて、省・自治区・直轄市ごとに「中国民間故事集成」が編集された。

二〇〇八年までに全三〇巻(上下巻があるため三四冊)が出版され完結したが、このシリーズの索引は作られなかった。つまり、本書は中国の民間故事研究者にとって、待望の索引である。しかもCD-ROMが付属しており、単語からの検索もパソコン上で行える。研究を進める上で、どれほどの便宜を図ってくれるか計り知れない貴重な索引である。

(立石展大)
(二〇一三年十二月／非売品)

『震災と芸能—地域再生の原動力』

橋本裕之著
追手門学院大学出版会刊

東日本大震災はさまざまな学問・研究分野に難問を突き付けた。本書は著者の岩手県沿岸部での活動を原点とし、それを通した講演や論文によって構成されている。「：東日本大震災以前の鶴鳥神楽と釜石虎舞」「：無形文化財への支援と今後の課題」「クルーズ客船で被災地観光：民俗芸能を鑑賞しよう」「：復興への取り組み」と続く。後半の「奈奈子祭のはじまり」「奈奈子祭の挑戦」は圧巻である。釜石市箱崎町、鶴鳥神楽の宿主名代の笹山政幸・奈奈子夫妻と著者三名が奈奈子祭実行委員会を結成し、一三年二月二十四日に奈奈子踊・岳神楽・鶴住居虎舞・鶴鳥神楽が出演。この画期的な祭は人間愛に支えられた物語の発生につながる。「刻々と変化する状況に伴走してきた活動の報告」は「地域再生の原動力」であり、心の復興でもある。著者の活動ぶりは専門領域を遥かに超えている。パワフルの存在として眩しいほど輝いている、と書いても過言ではないだろう。

(米屋陽一)

(二〇一五年四月／本体一六〇〇円)

『語りの講座 伝承の創造力—災害と事故からの学び』

花部英雄、松本孝三編
三弥井書店刊

本書は平成二十五年度に行われた「語りの講座」の講演が収録されている。「災害・事故に学ぶ」というテーマで四部構成である。「東日本大震災から学ぶ」では、被災地と復興について考察している。その中では安易に使われてきた言葉の捉え直しもされている。「歴史の災害から学ぶ」では、江戸時代の「災害」や近代の「公害」について論じている。災害史を通して、東日本大震災後の日本が学び取るべきことを提言している。「災害のフオークローから学ぶ」では、「被害の記憶」の伝承や、シベリアでの説話の語り方を論じている。これらを通して、災害に関する伝承の在り方をも考察している。「説話・伝承から学ぶ」では、「災害の伝承」を捉えている。伝承や語りれ方を分析し、人間の災害への向き合い方を問わなければならない。先の震災にどのような向き合っていくべきか。どのように伝えていくべきか。「災害列島」日本が蓄積してきた過去の災害や伝承に学び、「次のステップ」へ進むためのよき指南書である。

(玉水洋匡)

(二〇一五年五月／本体二八〇〇円)

『震災と市民2 支援とケア』

似田貝香門・吉原直樹編
東京大学出版会刊

先に東北大学で行われた東日本大震災に関する本学会で、私は福島県からの発信およびその県についての発言がなされない不自然さについて質問をした。福島県こそが学際的なまなざしを必要とする現実にあると思われる。たからであった。あたかも当日、福島原発事故で避難中の女性が焼身自殺をはかったというニュースが報じられていた。本書が持つ意味深さは現実から目を外らさないことである。東京大学被災地支援ネットワークが現場に立ち人びとと関わりを創り、心のケアに取り組む実践の重さを考察する。身体の声を聴く方法として足湯ボランティアをし、つばやき分析をする似田貝報告を冒頭に(Ⅰ)被災者支援とケア論、宗教者における(Ⅱ)心の平安と魂の救済の二部構成。(Ⅰ)に石井正己論文「過去の災害の被災者の声を語り継ぐ」も取載。学的警鐘である。コラムに「放射能と福島の子どもの健康」「帰還と生活安全」があり放射能禍実録として注目すべき。

(野村敬子)

(二〇一五年八月／本体二六〇〇円)

『ブックレット(むらの記憶) 1
—小々汐仁屋の年中行事—

東北芸術工科大学東北文化研究センター編集 川島秀一著
東北芸術工科大学東北文化研究センター刊

この書物は宮城県気仙沼市小々汐という漁村の一軒の家の年中行事を写真・図版とともに記述したもの。そしてこの村も家も今はない。東日本大震災は全てを奪い去ってしまった。けれども著者は言う。「私は〈小々汐〉と末長く付き合っていると思う」と。およそ十年におよぶ時間をかけて著者は小々汐と向きあい、こうした写真と記録を残してくれた。現代でも類稀なフィールドワーカーである著者の原点にあたる場所が〈小々汐〉であり、そこでどのように行事や儀礼をとらえ、話に耳を傾けたか、辛うじて残ったファイルドノートと写真によるギリギリの記録が本書である。本書をめくると一軒の家がどれほど豊かな民俗現象を伝えていたかを如実に知ることが出来る。それらはまさに生活であり、伝統であったらう。あるいは海辺で生きること、そのものであったのかも知れない。そしてそれが著者との出会いによって、何とかこうしたかたちで記し留められた。その意味を考えるために薄いけれど、とても大きな一冊ということが出来る。(小池淳一)

(二〇一四年三月／非売品)

『青森文芸ブックレット①本と戦争
—本は、戦争とどう関わったか—

佐々木達司著
青森文芸出版社刊

本書は戦後七〇年の今年、青森県近代文学館で開催された特別展「青森の文学者たちの戦前・戦中」文学講座の講演録である。内容は二部構成で、第一部は、著者の戦時中の体験が記されている。「講談社の絵本」が、「咲爺」から「日本の陸軍」へと戦争もの一色になり、昭和一九年には「幼年俱樂部」は廃刊され、「若校」・「海軍」といった陸・海軍少年雑誌が創刊される。このような不自由な出版状況と、本への飢餓感から、著者が学校の教材室の禁書を持ち出す体験が記される。第二部は、出版統制と検閲、戦時の図書館本の押収等、表現の自由が奪われる中、青森県の文学者たちの抵抗が記される。著者は、発禁図書「青森県プロレタリア詩集」を企てた杉沼秀七の抵抗と挫折や、特高から投稿者を守る「東奥日報」の竹内俊吉、「月刊東奥」の林柁次郎といった編集者の苦悩を記し、表現の自由と戦争への加担という出版物の両面を教示する。これは「口承」は、いかに戦争と関わったか」という問いにも繋がるだろう。(小堀光夫)

(二〇一五年九月／本体四六三円)

『人生のハレとケ』

大島建彦著
三弥井書店刊

本書は著者が一九八〇年から二〇〇八年までに発表した「ハレとケ」に関わる論をまとめたものである。研究史を概観しながら読むと著者の意図とは別の興趣がある。一九八二年に発表された「祝儀の忌み」では、当時議論がさかんであったケガレ論に触れ、「ハレとケとケガレとの対立というように、あきらかな三極の構造をなしていたとは思われない」と明言している。三〇年以上たった今、ハレケケガレの循環論に言及する人もいなくなつたが、ハレとケガレに分けることのできな「祝儀の忌み」についてもここで書かれた以上のことは分かっている。ここに思い至る。「しつけの伝統」では子どもを「一人前」にする「しつけ」の厳しさが示され、「子育ての伝統と現代」では、童言葉から昔話にいたる声の教育を示し、子どもに多様な人生の役割が「再詠」や「再創造」にはたしてどれほど受け継がれているのか」と問うのである。平易な語り口に油断せずに読みすすめたい。(山田巖子)

(二〇一四年十月／本体二八〇〇円)